

日本原子力学会 第 113 回倫理委員会
議事録

1. 日 時：2019 年 8 月 7 日（水）13:30～17:20
2. 場 所：原子力機構 東京事務所 第 4 会議室
3. 出席者：大場委員長、福家副委員長、神谷幹事、伊藤委員、菅原委員、高木委員、土田委員、中野委員、中村委員（委員 13 名中 9 名出席）
藤澤特別委員、オブザーバー 嶋田氏

4. 資 料：

- 倫 113-1 日本原子力学会 第 112 回倫理委員会 議事録(案)
- 倫 113-2 委員の退任、新委員候補について
- 倫 113-3-1 倫理委員会活動計画
- 倫 113-3-2 倫理委員会役割分担表
- 倫 113-4 2019 年秋の大会倫理委員会企画セッション 予稿
- 倫 113-5 2019 年春の年会倫理委員会企画セッション参加者アンケート自由記述への回答
- 倫 113-6 次回倫理研究会
- 倫 113-7 (欠番)
- 倫 113-8 研究機関への安全文化に関するアンケート
- 倫 113-9 次回倫理規程改定に向けた検討について

5. 議事概要：

(1) 前回議事録の確認

神谷幹事から資料 113-1 に基づき前回議事録（案）について説明があり、特に異議なく了承された。

(2) 委員の退任、新委員候補について

大場委員長から資料 113-2 に基づき、嶋田氏（原子力安全システム研究所）から委員への立候補届の提出があったことが報告され、立候補理由について説明があった。その後、出席委員の満場一致で委員就任を委員会として承認した。次回学会理事会は 9 月 30 日の予定であり、嶋田氏の委員就任の了承を上申することとした。

(3) 倫理委員会の活動計画について

福家副委員長から資料 113-3-1 及び 113-3-2 に基づき説明があり、以下を確認した。

- ・倫理規程改定の欄の「規程見直し方針決定（タスク内）」との記述は削除する。毎回の委員会で柔軟に議論を進めていく。
- ・「研究機関の組織文化」と「研究者倫理の検討」との記述は、いずれも「研究機関の安全文化」と修正する。
- ・委員会内での特別委員、委員による“ミニ講演会”（各自からの話題提供）を最近実施してい

- ないので、神谷幹事が企画・調整する。
- ・足立委員、手柴委員、嶋田氏の担当は、今後調整する。

(4) 2019 年秋の大会企画セッションについて

菅原委員より資料 113-4 に基づき、2019 年秋の大会企画セッションに係る進捗状況について説明があった。

- ・学会事務局に、企画セッションの「みどころ」を 8 月 15 日までに提出する。また、学会メーリングリストでの案内も手配する。
- ・講師の旅費等の調整も今後行う。
- ・講師との懇親の場についても今後調整する。
- ・当日の役割分担については、当日参加できる委員にメールベースで割り振っていくこととする。

(5) 2019 年春の年会企画セッション アンケートへの対応について

大場委員長より資料 113-5 に基づき説明があり、コメント等がある場合は大場委員長に連絡することとした。本件についての倫理委員会ホームページでの発信等の扱いについては、引き続き調整していく。

(6) 今年度倫理研究会について

福家副委員長より資料 113-6 に基づき説明があり、以下の議論があった。引き続き検討していくこととする。

- ・「プリンシプルベースのアプローチ」は今に始まった議論ではなく、テーマとして新鮮味がないのではないか。
- ・来年度から新検査制度が本格導入されるが、最近米国の ROP 導入・定着・改善の背景等をまとめた書籍が出版されており、倫理や倫理規程を深掘りする議論にも資するかも知れない。
- ・規制側の講師も招いて、英国のストラテジープランのようなものを例として取り上げて議論をすると、安全文化や現場の技術者の倫理という観点から意義があるのではないか。
- ・高レベル放射性廃棄物の処分や事故での汚染土の中間貯蔵の問題など、議論が先送り、あるいは目を覆っているような課題を取り上げて各人の本音の議論をしてみるのもよいのではないか。ただし、倫理委員会でカバーする範囲はどこなのかを意識する必要がある。
- ・クローズドの研究会とするのであれば、倫理委員会として議論ができていないこと、原子力に関わる課題などをフリーにディスカッションする場とする案もあるのではないか。
- ・開催時期としては、現実的には 12 月頃がよいのではないか。
- ・クローズドの研究会であれば、大学の東京オフィスなど、会場の候補も増えると思う。

(7) 2020 年春の大会企画セッションについて

中野委員より、以下の企画案の説明があり、議論を行った。

<企画案>

- ・福島の方の現在の生の声、肌感覚での声を語ってもらう。想定としては、医療関係者、報道

関係者、農業関係、漁業関係、あるいは観光大使として福島の復興に尽力されている方などに1F事故以降の福島における活動における苦勞した点、考えさせられた点、悩んだ点など。そのような声から技術者は何ができなかったのか、何をすべきか、何を求められているか、倫理的な試練で考究し、倫理委の活動や倫規程改定の参考にしていく狙い。文句やクレームや愚痴のはけ口ではなく、前向きな議論のキッカケを創出できる方を講演者として選定する。

<議論>

- ・現地の方より、その周辺に起きていることについての議論が必要ではないか。オリンピックがあることの議論や、避難者のいじめの問題。福島の周辺の倫理をテーマにすることもできるのではないか。
- ・1F事故を踏まえて原子力業界で取り組んだことを題材にするという視点もあるのではないか。
- ・1F事故以降の倫理委員会の活動を紹介し、それに対して福島のステークホルダーの方からコメントをもらうという構成はどうか。ステークホルダーとしては、福島県の行政、汚染土や汚染水の課題に携わっている方、あるいは1Fサイトで働いている方など。倫理委員会の活動を振り返るということで、福島大学で企画する意味合いがあるのではないか。
- ・1F事故後に社会的な課題の影響緩和に携わった方から講演いただくという案はどうか。医療関係者、消防、自衛隊、規制当局など。
- ・今の視点を重視して、今の時点でやれることという視点が重要ではないか。
- ・2Fの廃炉も発表され、廃止措置以外は福島からは原子力事業がなくなっていく。福島と原子力の関わりを問う企画、福島とどう関わっていくのかというところに焦点を当てるべきではないか。
- ・1F事故を起こした我々の原罪を反省するということでは、所詮、我々の自己満足ということに陥らないか。
- ・未来につながる議論が要るのではないか。倫理委員会として福島にどう関わっていくのか。
- ・1F事故の課題や廃棄物の問題の解決が遠い中で、次世代に倫理をどう引き継いでいくのかという観点での議論が必要ではないか。

本日の議論を踏まえ、引き続き議論をしていくこととした。本日の議論を神谷幹事が整理をし、委員長とも相談しつつ、次回以降の議論に繋げていくこととする。

(8) 研究機関の安全文化について

大場委員長、伊藤委員より資料113-8に基づき説明があり、議論を行った。

- ・今回試行的に実施した原子力機構職員への安全文化に関するアンケートは、ある種特定の若手職員へのものであり、それゆえ本音が見える結果となっているのではないか。
- ・同じアンケートを、原子力機構内で範囲を広げてとってみて、どのような結果となるかは興味深い。
- ・他の研究機関でも同じアンケートをとったらどのような結果となるかを把握することも一案である。
- ・本件を議論する目的をあらためて確認しておく必要があるのではないか。
- ・事業者、研究機関と立場や組織の事情は異なっている、学会という場を通じてお互いに高

め合うような活動は意義があるのではないか。

議論を踏まえ、担当である伊藤委員、中村委員において、今回の貴重な試行アンケートの結果について考察として一定のまとめを行うとともに、前回委員会の際にアクションとして研究機関の安全文化の議論の今後の進め方について、より具体的な内容とし、明確化していくこととする。

(9) 次回倫理規程改定に向けた検討について

神谷幹事より資料 113-9 に基づき、前回委員会で各委員のアクションとした改定論点の抽出、改定案の検討等についての 2 回目の集約状況について説明があった。

意見の提出が未だの委員もいることから、次回委員会に向けて、再度 3 回目の各委員による検討を行い、集約をすることとした。その後、タスクを設置するか分担を決めるか等の進め方を具体化し、検討を促進していくこととする。

(10) 日本学術振興会先導的研究開発委員会「未来の原子力技術」について

中村委員より、同委員会の最近の状況に関して紹介があり、活動期間が今年度までなので今後報告書の作成に進んでいくこと等の説明があった。

同委員会への本倫理委員会からの参加に係る覚書の改定の扱いについては、同委員会の芹澤委員長に大場委員長から連絡を入れて、その状況を受けて対応していくこととする。

(11) その他

・神谷幹事から原子力学会誌 6 月号と 7 月号に投稿した倫理委員会活動報告について各 200 部ずつの別刷りを購入したことの紹介があり、各委員が委員会外で講義や研究会を行う際に適切に配布、活用できることとした。

6. 次 回：第 114 回 2019 年 10 月 2 日（水）13:30～17:00@日本原子力学会事務局会議室

以上